



アトピー性 皮膚炎について

アトピー性皮膚炎は強いかゆみを伴い全身に湿疹病変を生じる慢性炎症性皮膚疾患です。

「皮膚バリア機能低下」「皮膚の炎症」「かゆみ」が影響しあいながら良くなったり悪くなったりを繰り返します。人の皮膚は外部の刺激から体内を守っています。これを皮膚のバリア機能といいます。

アトピー性皮膚炎の人の肌は、皮膚が乾燥しているため、通常より皮膚のバリア機能が低下しています。つまり外部からの刺激を受けやすく刺激に反応しやすいともいえます。そのため気管支喘息、アレルギー性鼻炎、アトピー性結膜炎などのアレルギー疾患を合併することが多くあります。

アトピー性皮膚炎の症状は顔（額、眼、口、耳の周り）首、手足の関節、体幹など、体の様々な部分に現れます。年齢ごとに皮疹の性状や分布が異なります。基本となる三つの治療があります。

①薬物療法

薬物の使用により皮膚の炎症を抑えます。塗り薬による外用療法と飲み薬や注射による全身療法があります。薬物療法は外用薬が基本です。十分な範囲に十分な量を塗りましょう。皮膚の炎症をすばやく、そして確実に抑える事が大切です。

内服薬による治療では、かゆみがひどい場合は、抗ヒスタミン薬服用でかゆみを抑えます。改善が見られず重い症状が続く場合、成人では注射薬による治療を行う場合もあります。



②スキンケア

皮膚のバリア機能の低下を防ぐため、保湿剤の使用、入浴、シャワーなどで皮膚を清潔に保ちます。入浴、洗浄方法における留意点では入浴温度が高くと、かゆみが強くなるため、38～40℃に設定します。

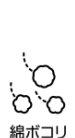
乾燥が強い部位や、冬の乾燥する季節、石鹸の刺激が強い場合は必要以上に使わない、逆に脂性肌や脂漏部位、軟膏を毎日塗る部位、感染症を繰り返す部位には積極的に使用します。

よく泡立てて皮膚を傷つけないように洗い、十分に洗い流します。入浴後はすぐに皮膚から水分が失われるため、汗やほてりが治まったら速やかに保湿外用薬を塗りましょう。



③悪化因子の検索と対策

汗や髪の毛、衣類との摩擦などの刺激や、外用薬や化粧品、金属などによる接触アレルギー、食物や花粉、また乳児期以降の方ではダニやホコリ、ペットの毛などが悪化因子となっている場合があります。悪化因子を見つけ対策をとることが重要です。アトピー性皮膚炎はストレスによって悪化します。かゆみが続くこと自体がストレスになるため、しっかり治療を継続することが大切です。



綿ボコリ



食品クズ



花粉、排気ガスなど



髪の毛やフケ、
ペットの抜け毛



タバコの煙



繊維クズ



砂ボコリ、土砂など

アトピー性皮膚炎の治療は自己判断で中断せず、医師との良好な関係を築き、不安なことや分からない事があれば何でも相談しましょう。



**診療予約は
こちらから**

電話予約：0799-62-5566（診療時間内）

ネット予約：<https://ssc6.doctorqube.com/soyama-clinic/>（24時間対応）

携帯電話からは右のQRコードからでも予約できます

